

## 「帰国子女教育を考える会」第66回研究例会 概要

[2013年11月16日(土) 14:00~17:00 於:大阪市福島区民センター]

テーマ:「帰国生受入校の今 –グローバル化をふまえた各校の改革–」

発題者:(敬称略)

川井 国孝 (同志社国際中学校・高等学校校長)

眞砂 和典 (関西学院千里国際中等部・高等部校長)

岩崎 成寿 (立命館宇治中学校・高等学校副校長)

ファシリテーター(司会進行役):赤塚 民三 (元大阪府立高校校長・元企業教育相談員)

### 発題要旨

今回の研究例会は、当会設立の原点に再度立ち戻って、近畿(京阪神)圏内3私立帰国生受入校の共通点を再確認すると共に、それぞれの独自性をご紹介いただいた。なお、本会開催に先立って、各校代表への事前調査・取材を行い、10数項目の回答結果を文書にして用意し、当日出席者に配布した。会の進行は大きく4部構成をとった。Part I から Part IV ごとに各設問を用意し、各校からそれらに答えるかたちで説明があり、その後各 Part ごとに質疑応答があり、最後に全体質問・コメントに対する各校からの応答で終わった。

紙幅の都合から、各 Part の設問内容と全体を通して各校の紹介内容、それに本会テーマの副題にもある「各校の改革」を、各校ごとにまとめて以下に記す。

Part I は「今までの帰国子女教育を総括する」、Part II 「帰国子女や帰国子女教育は変わったと言われるが、現在はどうか?」、Part III 「昨今、喧伝されるグローバル人材の育成に対する学校の教育方針等、さらに具体的実践例について」、Part IV 「学校改革を含めたアピール」であった。

なお、各校とも独自に作成された「学校案内」や「帰国生向けリーフレット」等の印刷物を用意され、配布して説明された。

以下、同志社国際中学校・高等学校川井国孝校長の発題である。同高等学校は文部省(当時)の要請に基づき、首都圏2校に続き、関西圏では初めての「帰国子女受入校」として1980年に創設された。初年度一学年約200名中の帰国生は約2/3であった。創立30数年後(2013年4月現在)の帰国生割合には変化なく、中学校・高等学校共に約2/3である。現在、国際交流プログラムの種類を増やし、海外の大学への進学希望者が増えて帰国生の姿も多様化して来ている。もともと「帰国子女受入校」としてできた学校なので、開校当時から「適応」の体制を充実させながらも、「特性伸長」教育を大切にするのは、今も変わらない。建学の精神 – 「偉い人よりも良い人になる」(新島襄の教え)、一人ひとりの良さを伸ばす – を学校教育の基本理念として尊重することの重要性を強調された。本人の体験・個性、それに希望を最大限尊重する指導に心がける。要は、自分と違う文化(異文化)の存在を認識し、尊重する。その上で対等な意見交換が可能な人材。より具体的には、高い語学力(英語力)と真のコミュニケーション能力を身につけ、国際社会で活躍できる、いわゆる「グローバル人材の育成」は創立当初から変わらない。同志社大学・同志社女子大学等への学内進学率は90%以上である。

次に、千里国際中等部・高等部眞砂和典校長である。同校(SIS)は、同じキャンパス(千里国際キャンパス-大阪府箕面市)に併設された大阪インターナショナルスクール(OIS)と共に、学校の歴史を刻んできた。すなわち、創立は共に1991年である。現在、一つのキャンパスに帰国生・一般生・外国籍生徒がほぼ1/3ずつおり、真の国際教育を日本に誕生させ、多文化教育を実践する中で生徒一人ひとりの個性と才能を磨いている。多様な文化背景を持った生徒や教員が世界各地から集まってくる学校であり、そこではお互いがコミュニケーションを大切にし、違いを認め合うことを人間関係の基本とする。本校では、細かな校則はないが、次に示す「5つのリスペクト」にそった行動が求められる。1.Respect for Self(自分を大切にする) 2.Respect for Others(他の人を大切にする) 3.Respect for Learning(学習を大切にする) 4.Respect for the Environment(環境を大切にする) 5.Respect for Leadership(リーダーシップを大切にする)である。

これらの行動指針を尊重しながら、自らの人間性をいかにして高めるかについても考え、学び合っている。このような日々の学習と学校生活を通して、“Informed, Caring, Creative Individuals Contributing to a Global Community” – 知識と思いやりを持ち、創造力を駆使して世界に貢献する個

人を育てるのが、本校の使命である。これは、2010年4月に合併した関西学院(KG)のスクールモットーである **Mastery for Service**—奉仕のための練達—にしっかりと繋がっている。

校内の最近の特徴として、個人留学生徒の帰国や国際結婚家庭の子どもの増加傾向等、多様性が拡大している。そのため、帰国後の学習が滑らかに継続できるよう、「学期完結制」を1999年から導入した。それは、取りたい(取るべき)授業を取りたい時期に選択できるシステムである。IBDP 取得も広い選択肢の一つとなっている。関西学院大への進学率は、40%(院内枠は60名位)程度であるが、生徒自身が目指す将来への飛躍をサポートするのが、学校の使命であると言われた。

三番目が、立命館宇治中学校・高等学校の岩崎成寿副校長である。校長が外国人なので、日本人副校長が帰国生教育スペシャリスト兼国際センター長を伴ってみえ、説明された。本校の創立は1995年で、1年目の第1学年540名中に占める帰国生数11名(約2%)からスタートし、2013年度は344名中62名(約18%)までになった。現在の本校の特徴は、多彩なコース制による学力と人間力の伸長を目指していることである。すなわち、中高一貫・普通・文科・理科・IM(イマージョン)・IB(国際バカロレア)各コースを設けている。本校教育の3つの特色として、1.一貫教育(世界に羽ばたく中高大一貫教育)、2.国際教育(卓越した英語力養成と豊かな国際体験)、3.全人教育(大学卒業後を見据えた学力・人間力形成)を謳っている。さらに、掲げる教育目標は「立命館の建学の精神「自由と清新」と教学理念「平和と民主主義」に基づき、卓越した言語能力に基づく知性と探究心、バランスのとれた豊かな個性、正義と倫理に貫かれた寛容の精神を身につけた未来のグローバルリーダーを養成し、世界と日本の平和的発展に貢献する」である。なお、過年度(2012年度)の大学進学実績は、卒業生の約90%約300名が立命館大学へ、APU(立命館アジア太平洋大学)10名、国内他大学約20名、海外大学約10名であった。

その他、3校共通のフロアーからの質問例としては、1.編入試験(編入受入れの仕組み、選考基準等)について、2.海外子女へ発信したい言葉、3.教員のリクルート方法、等々があった。

会では帰国生を受け入れている各校や府県教育委員会の例会への参加を呼びかけており、今後の関係者の参加を歓迎したい。

(以上は当日の記録を基に事務局の責任で整理したものである)

## 「帰国子女教育を考える会」第67回研究例会 概要

[2014年3月1日(土) 14:00~17:00 於 大阪市立総合生涯学習センター]

テーマ:「帰国生の保護者はこう考える」

発題者:(敬称略)

「関西帰国生親の会 かけはし」 代表 青木 真子  
栗岡 敦子

「神戸帰国子女親の会 ECHO」代表 上月 素子

「海外&帰国保護者のサロン ピアーズ@関西」代表 山口 久仁子  
岡野 東子

司会進行役: 森本 昭憲 (海外子女教育振興財団関西分室 教育相談員)

発題要旨

海外で、あるいは帰国後に、多くの困難やストレスを抱えながらも健気に生育していく子ども達の様子をつぶさに見、共に戸惑いながら我が事として、あるいは支援者として、海外子女・帰国子女の教育について誰よりも悩み、考えているのは他でもないその保護者達である。日本の教育制度が少しずつ動き始めようとしているのではないかと見られる今、帰国生の保護者達が集う会は、この問題について、何を感じ、日本社会や日本の教育制度についてどうあって欲しいと考えているのか。ということで、関西で活躍中の上記3団体それぞれから保護者の声を代表して発題していただき、参会者と自由に討議することで、帰国生問題についての理解を深め、今後の指針を得たいという今回の例会のテーマ設定がなされた。

以下に、当日のICレコーダーの録音や資料、記録者のメモ書き等をもとに研究例会概要を記すが、よく聞き取れなかった部分もあり、あくまで記録者の不十分な要約であることをお断りしておきたい。

最初に、「関西帰国生親の会 かけはし」(1984年10月設立、海外経験者が集い生活や教育の体験をシェアし、海外赴任する家族を渡航前から帰国後までをサポートし、関西圏の学校案内を発行している団体)は、年2回発行の会報や毎年刊行している『帰国生への学校案内《関西》』、月1回の定例会、教育セミナー・イベントの開催、国内・海外の教育や生活に関する情報の提供、メールによる無料教育相談などの活動について報告された。会員構成は、大阪、兵庫、京都、奈良、滋賀の国内会員と、イギリス、アメリカ、インドネシア等の海外会員からなり、会員の滞在経験国は24か国に渡る。『帰国生への学校案内』などで情報を提供するにあたっては保護者目線での客観性と中立性を重視し「かけはし」が学校を評価するのではない。広い視野で検討して読者に判断してもらうなどの意味合いから帰国生受け入れ校以外の学校も入れる、公立小・中学校は教育委員会の情報に絞る、担当教員、帰国生本人等の声も掲載するなど工夫し、広く直接取材し多方面にわたって具体的で客観的な情報が届けられているかについて内部検討を重ねているなどが説明された。海外においても国内においても、どのような学校を選択するのかわる悩むケースがあるが、子どもにとっての「良い学校」とは子どもの数だけあるという発言もあり、親の先入観で対応しないことが重要であると述べられた。

次に、「神戸帰国子女親の会 ECHO」(1990年設立、帰国子女を持つ親としてお互いの情報交換や親睦を図るとともに、帰国子女を持つ親の立場から日本の教育や社会の問題を考えることを目指す団体)は、会の設立の意図や活動内容、会員の状況等を紹介された。活動内容として、年2回の会報の発行、勉強会、会員名簿の作成とアンケートの実施等が挙げられた。会員数(2013年10月現在)は約60家族で、神戸を中心に、西は明石、東は芦屋、西宮、宝塚、伊丹、池田、そして、京都と広域。アメリカ、マレーシア、タイ、中国等に滞在中の会員、北海道、東京等へ転勤後も続ける会員もいる。会員の子ども状況は、出国時平均年齢4.7歳、帰国時平均年齢9.1歳、海外滞在平均年数4.4年、入会時平均年齢10.3歳、現在平均年齢23.9歳である。会員の子どもが帰国して一番つらいと思ったことなどを調査する中で見えてきたものとして、帰国後の表面的な成果を求めず、焦らず、たゆまず支えるために、「家庭(母父)のあり方が鍵」であること、子どもの居場所であり学びの拠点である学校の重要性として、「自分を見守ってくれる人がいると実感できる先生の眼差しやひとことは大きな支えとなり力の源泉になる」こと、帰国子女とひとまとめにできない現実を見据え、「帰国後の子どもはそれぞれの速度で日本に着地する」こと等を挙げ、情報や選択肢が増えた現代であっても不変の留意点があると指摘された。

最後に、「海外&帰国保護者のサロン ピアーズ@関西」(2007年3月設立、関西へ帰国した人々や海外赴任した家庭に関心を持つ人々、教育に関心や悩みを持つ方が集まり、語り合い、学び合い、体験を生かした社会貢献活動をする団体)は、会の設立の意図や小規模なので親身になれるという特徴、活動内容(月一回の茶話会と相談会)等を紹介された。相談内容事例から、最近、国際結婚など赴任者の背景が多様化してきていることを示し、公教育におけるグローバル化への対応および、きめ細かな受け入れを行う私立校や独自の実績を持つ国立大附属校の拡充を進める必要性を訴えられた。さらに、会員の方の個別の事例の紹介があり、子どもをアメリカの現地校に行かせた事例では、帰国後に英語を保持する方向での学校選択を考えたと述べられた。現在、日本の教育界で提唱されているグローバル化において、帰国生の海外体験や異文化体験がより生かされる、ボーダーレスな意識を望むとも述べられた。もうひとり中国で国際学校を選択した事例を語られた。学費が高いという問題も語られたが、国際学校へ行かせる理由として、英語の習得というよりも(ローカル化した外国人社会という)「多様性の理解」にあると述べられた。また、アジアでは補習校が少ないので、日本語の補習をどうするのが問題であること、アジアでは「日本人だけの社会」を形成し、日本人が孤立しがちであるので、親が「国際社会(外国人社会)」に入っていく必要があると述べられた。

参加者を交えた自由討議では、「親は自分の経験をもとに学校や子どもの状況をとらえがち」、「アイデンティティクライシスには、本人への共感とともに親への対応もポイントになる」、「国際学校を選ぶ際は子どもの特性を見極める必要がある」等の声が挙げられたほか、「日本の公立学校において、(帰国生や派遣教員の)海外体験や異文化体験を生かして、日本の教育の現場を変えることは絶望的である」という意見もあったし、「親の会」は、どうしても「母親の会」になりがちで、「父親の声」も反映させる必要があるという意見もあった。最後に、帰国子女教育に携わる関係者のネットワークを充実させようという呼びかけがあった。出席者は41名と盛会であった。

(以上は当日の記録を基に事務局の責任で整理したものである)

「帰国子女教育を考える会」事務局

大阪YMCA国際専門学校 国際高等課程 内

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1-5-6

大阪YMCA土佐堀会館 4F

TEL: 81-(0)6-6441-0848

FAX: 81-(0)6-6443-7510

小路 清一 (しょうじ きよかず)

e-mail : [shoji-kiyokazu@osakaymca.org](mailto:shoji-kiyokazu@osakaymca.org)